

天理日仏文化協会こども日本語講座の取り組み⑥

4) 子供への日本語教育法を考える (前号よりの続き)

カリキュラムの見直し

フランスで育つ日本人の子供たちへの日本語教育を考え、教師間の交流と研鑽を積む場として、2006年9月の新学年度を前に、国語教師勉強会を立ち上げることになった。この機会に、まず本校のカリキュラムを見直すことを提案した。これまでは、幼稚園科の2年間でひらがなの50音を学び、小学1年生に当たる1組が1年上、小学2年生に当たる2組が1年下の教科書を、それぞれ1年かけて学んでいた。そして、3年生に当たる3組からは、2年上下、4組は3年上下と、日本の学年とは1年遅れるが、各学年の教科書を1年で終えるカリキュラムが組まれていた。

このカリキュラムを見直す中で注目したのが、1、2組の間は授業も休まず通っていた子供たちが、3組に上がる頃から、徐々に退学や転学するために人数が減る傾向にあることだった。

その理由は様々であるが、在仏歴の長い教師の方々からは、日仏バイリンガルの子供たちの抱える次のような問題を聞かせてもらった。本校の3組は、現地校では「CM2」という学習がだんだんと難しくなる学年で、他の子供たちに比べて、日仏バイリンガルの子供たちは、かなりフランス語の語彙力や理解力も努力が必要となり、日本語の勉強に時間をかける余裕がなくなるのだということであった。

一方、本校の3組からも、90分授業ではあるが年間34回の授業日数で、各学年の教科書を上下とも学習しなければならず、授業中に各単元をじっくりと読み込むことや、漢字を確実に覚えるまで練習することは、本人の努力と家庭での支援がなければ、かなり難しくなってくる。その結果、理解の遅れがちな子供は、取り残されたような不安から落ち着きとともに学習意欲もなくなり、退学に至ったのかもしれない。

こうした本校と現地校との兼ね合いも考慮し、基本的な日本語の文章力や漢字の読み書きの力を養う時期でもある2、3、4年の教科書の上下を、それぞれ1年ずつかけていねいに学習するカリキュラムに変更したいと考えた。そうすれば、途中で日本語の学習を諦める子供が少なくなるのではないかと予想したのである。そのかわり、ひらがなの学習は、すでに幼稚園科で2年間習っているので、1組でのひらがな学習の時間を削ることで、1年上下を1年間で終えることにした。ただ、新学年度から全学年がカリキュラムを変更することは、未履修の単元や漢字なども出てきて不都合もあり、担当者の小林氏による5年の移行計画を進めて、現在の形に至ったのである。(2月号の資料参照。その後も見直しは続けられている。)

指導の基本は、教科書の音読

子供クラス国語科は、日本語を母国語とする子供たちを対象としているのだが、同じクラスの中でも、それぞれの能力に加えて、家庭環境などによっても理解力は千差万別である。それは、授業中や音読発表会での音読の様子を見れば一目瞭然で、大きな声で上手にすらすらと読める子供は、理解もできているが、小さな声でたどたどしく一つひとつ文字を拾い読みしている子供は、理解も十分ではないことが分かるのだ。

特に、国際結婚家庭の場合は、配偶者への配慮から、家庭での会話はフランス語が中心になるために、子供たちは日本語を耳にする機会が少なく、理解できる語彙も少ない子供が多い。しかし、日本語が全く理解できないわけではなく、平易な言葉に言い換えれば、大体のことは理解できる子供たちである。

昨今、日本でも『声に出して読みたい日本語』(斎藤孝著)や、NHK教育テレビの「にほんごであそぼ」のような日本語ブームで、全国の小学校では、子供たちに有名な歌舞伎や落語などの台詞を盛んに暗唱させているという。以前から、小学校では、書かれている内容を読解することに加え、漢字などの文字を覚え、助詞の「て、に、を、は」の正しい使い方(文法)を身につけるためにも、教科書の音読練習は欠かせない取り組みであった。

同様に、本校のような能力差のある子供たちにも、毎週の宿題として学校と家庭で繰り返し教科書の音読をすることは、日本語に接する機会が増え、親子間で日本語の会話ができるようになり、自然に日本語の文法や語彙が身に付く効果が得られるのではないかと思われた。あらかじめ家庭で教科書を読み込んでおくことは、予習をして授業に臨むことにもなるので、より理解が深められる。この取り組みは、低学年のみならず、高学年までの全クラスで一貫して行うこととし、具体的な指導法も申し合わせることにした。なお、改訂のために不揃いだった教科書も同じものを日本から取り寄せることにし、家庭学習のために音読カードも作成した。外国で育つ子供たちへの日本語指導において、読解力や作文力を付けようと問題プリントばかりをさせることは、かえって劣等感を植えつけることにもなりかねず、逆効果だと思う。とにかく、「継続は力なり」と信じて、じっくり音読を基本に取り組みでいくことにした。

こども日本語講座音読指導案

① はじめに口慣らし

・早口言葉、歌、言葉あつめ(なまむぎなまごめなまたまご、じゅげむ、今月の歌、カードなど)。

② 朗読 CD を聞く

・第1時は、作品を全部聞くようにしたいが、学年と内容によっては、途中で切ってもよい。
・2回目からは、CDを聞かずに、3の模範読みや、4の一斉読みについてよい。

③ 模範読み

・教師がゆっくりと言葉の説明や、感想を言いながら、子供達の興味を引き出しながら1ページずつ読む。
・地の文と登場人物の声を変えると、おもしろさからまねをして読むようになり、理解も深まる。

④ 一斉読み

・教師が1文先に読み、同じ文を子供達が声をそろえて一斉に読む。
・会話文に役割を当てたり、男子と女子で、交代に読んだりすると変化が出て楽しい。

⑤ 音読テスト(音読カード)(音読は毎回宿題に出して習慣づけておく。)

・一斉読みの後、読みたい子を挙手させて、1ページずつ読ませる。
・スラスラ読めたら合格シールをカードに貼る。(少しでも進歩したら、ほめて励ます。)
・読めない子にも、当てて一文節をさきに読んだり、一緒に読んだりして、全員に参加させる。
・詩や短文は、暗誦できるまで読めるようにする。

音読指導のポイント

・聞いている子供達に、「音読は楽しい。」と思わせるような模範読みをしよう。
・教科書を開いて見せながら読むと、字が読めない子や集中できない子も注目する。
・読める子だけでなく、読めない子にも読ませる全員参加の音読をしよう。
・一斉読みや個人読みなど、子供達に読ませたら、必ず評価をして、ほめて励ます。
「上手にすらすらと、読めました。お家でよく練習してきたのね。」
「はつきりとしたいい声で読めました。みんなもこれくらいいい声でよめるといいね。」
「かきかっこのところは、まるで、くまさんがお話しているように聞こえました。」
「ゆっくりといねいに読めました。今度は、もつとすらすら読めるようにしましょう。」